

あなたのものたち Yours

藤田雅史

ひとりきりの生活を、孤独だとは思いません。

これがもし十九二十であれば、淋しいとか切ないとか、女友達をつかまえては誰彼かまわずにつまらない愚痴をこぼしていたかもれませんし、三十代も半ばくらいまでは、私なんて誰からも必要とされない女、などと焦って自尊心を傷つけながら生きていかなければならないのでしようけれど、あいにく女ひとりも六十を過ぎれば、おひとりさま、なんていう都合のいい流行言葉を笠に着て、悠々と平常心で日々を過ごせるものであります。

お友達が多い方ですし、旅行に出かけるのも気軽なもの。携帯電話（いまはスマホというのですね）だって、電話とメールなら若い人と同じように使いこなせますし、フェイスブックのアカウントだつて持っています。

そもそも私の母が九三歳で健在、古家を売り払って川沿いに新築のマンションを買い、そこでひとり暮らしをしているのですから、それより三十も年の離れた私が、老い先が不安だとか淋しいとか、そんな甘ったれたこと言っていられません。

「バアバは、ヒバアバになるんだよねえ」

お友達やご近所さんがいつ家に遊びにいらしてもいいよう普段から買い置きしているヨックモックのシガールを、マフィア映画のボスが葉巻でも吸うように口に運びながら、娘の早苗がソファにもたれてしみじみと言います。楽太郎が円楽になるんだよねえ、という感じで。

三十二歳のひとり娘は、ときどき大きく膨らんだお腹を抱えてふらりとやってきて、居間のソファに陣取り、テレビの情報番組を見たりおしゃべりをしたりして、時間をつぶして帰っていきます。やっぱ実家はいちばん落ち着く、のだそうです。出産予定日は来月で、それはつまり、私がいよいよ、母から「バアバ」の愛称を引き継ぐということです。そう、まさに落語家の襲名のように。

「あんだ、そろそろ帰らなくていいの？ 夕飯の支度はちゃんと毎日してるんでしょうね」

「してるつつの、うるさいな」

テレビがドラマの再放送に切り替わったので（私の好きではない俳優が主役の番組なので）、私は、珍しく娘が持参した土産を仏壇に供えるために重い腰を上げ、仏壇の襖を開けました。

孫が産まれると忙しくなる、と、それを経験したお友達はみな口をそろえます。もうバタバタよ、孫はかわいいけど、でもほんと疲れるのよ、と。

とりあえずこの家にも、新生児用のおむつやらベビー布団やらベビーバスやら、里帰り用に娘がネットで買ったものが頻繁に宅配便で届けられるようになり、それはいま、梱包された状態のまま、ひっそりとした仏間の隅で、じつと開封のときを待っています。先日は注文した覚えなどないのに、「孫と上手に付き合うムック」などというお節介な小冊子が勝手に送りつけられました。最初の数ページをめくっただけでなんだか腹が立ってきて、ベビーバスのダンボールの上に放置しています。

いつ足を踏み入れも、しんと静かで少し涼しい北東向きの八畳間。黒檀の仏壇には、この家に来てから見送った義父母と夫の位牌と遺影が重なって並んでいます。義父母は奥に、夫は手前に。この世界というのは不思議なものです。ひとがいなくなると、ひとが生まれてくる。おむつのパッケージの、愛らしいほほ笑み

をたたえた新生児の顔と、真面目くさった夫の遺影が微妙な距離感で対面していることに、私はなんだか、よろこびとかなしみがちょうど半分ずつマールブル状に練り込まれたような複雑な気持ちになるのです。

勝手に冷蔵庫を開けてなにやら検分していた娘が、おかーさん野菜ちようだい、と言うので、紙袋に詰めてやり、できるだけ重いものを持たせないよう、車の助手席まで運んでやると、腰にずきりと重い痛みが走りました。

ひとりきりの生活に不自由はありませんが、老いていく身体にはこれからどんどん不自由が増えてくるのだろうと思うと憂鬱です。私は病院がきらいだし、運動も不得意ですから、さてどうやって自分の身体をケアしたものかと、ときどき考えます。腰が悪くて孫を抱っこできない、そんな同年代のお友達は何人もいます。

「じゃあまた。あ、そのうちまたAmazonが届くから、受け取っておいてね」

娘はそう言い残して、夫婦で暮らすアパートへと帰っていきました。アマゾン、と聞かされた時に、私はいつも濃緑の密林がそのまま玄関先に運ばれてくる場面を想像し、小さな恐怖に身構えます。

様々なベビーグッズを比較検討して買い揃えることが、もはや娘にとっては趣味のようです。赤ん坊なんてすぐに大きくなって使えなくなるのだから、高いものでなくていいじゃない、と私なんかは思うのですが、デザイン性がどうの、機能がどうの、軽さが全然違うとかなんとか、それで結局、高価なものをネットで注文し、実家（私の家）に送りつけてくるのです。そのあたりの、どうせ買うなら高くてもいいものを、という消費に対するあの子の意識は、確実に夫のほうの血を受け継いでいると言えましょう。

娘を見送ってから、仏間で土産の中身を確かめると、三千円くらいする有名店のジュレの詰め合わせでした。こんなものを買ってくるのは、まあ、娘なりの誠意。

というのも、私たちは先週、ちよつとした口喧嘩をしてしまったのです。口にはしませんが、気まずさを少しでも和らげようという、お詫びのしるし、なのでしょう。私のフルーツゼリー好きを、あの子はよく知っていますから。

「あなたも生きていればジイジになれたのにね」

十年前と変わらない夫の顔を見下ろしながら、あなたは夏蜜柑でいいわね、私は白桃をいただくわと心の中で呟くと、ああ、まあただわ。胸のなかが、空気を抜かれたように窮屈になります。

娘との口喧嘩の発端は、

「なんでもかんでも、勝手に荷物を送りつけないでちょうだいよ」と、私が軽い気持で注意したことでした。

「はあ？ 里帰り出産するんだからしょうがないじゃん」

思ったよりも強い反応で、娘は言い返してきました。そういえば「孫と上手に付き合うムック」に、産前産後の女性のメンタルはデリケートなので配慮するように、というようなことが書かれています。

「だって置く場所に困るもの。こんな大きいもの」

「仏間に置いとけばいいじゃん、何も無いんだから」

「仏さまがいるじゃないの」

「それ以外なものもないじゃん」

「そうだけど、勝手に決められちゃ困るのよ。狭い家だもの」

「だったら、いらぬもの捨てちゃえばいいと思うんだけど」

「いらぬものって何よ」

娘が言いたいことはわかっていました。その先は聞きたくありませんでした。でも、なんだか夫が邪険にされるようで、私もまた、つい年甲斐もなく、娘にくっついてかかってしまったのでした。

「いらぬものなんか、ないわよ」

「お父さんのもの、もう捨てたら、って言ってるの。死んでから十年経ったんだよ。とつといたって意味ないじゃん。ていうか、お父さんの書斎、私の部屋に戻してよ。あそこ風通しも日当たりもいいし、赤ちゃんと一緒に過ごすのにちょうどいいよ」

「処分」じゃなくて「捨てる」。「亡くなる」じゃなくて「死ぬ」。そんな娘の言葉の選び方に、夫が軽んじられたような、私の人生が深く傷つけられたような気がして、私の心はひどく乱れました。

「そんなこと言わないで」

「だってそうじゃん、十年だよ、十年」

大学生だった娘は、卒業し、就職し、転職し、結婚し、そして出産。女の成長過程の十年は、長く、変化に富んだもので、振り返る十年前の地点は、確かに遠い過去に違いないでしょう。

しかし、私の十年は、それとは時間の長さが違うのです。私にとって十年前に夫が倒れたあの日の記憶は、いつまで経っても、ほんの去年の出来事のようなものなのです。

「いらぬものなんかない」

私ははつきりと言いました。真実を伝えるには、意固地になるしかない。そんなときもあります。

「何言ってるの、お父さんの服とか誰が着るの？」

「亮太さんが着るかもしれないじゃない」

「亮ちゃんが着るわけじゃないじゃん、サイズも違うし」

「でも」

「いい加減にしなよ。玄関のゴルフクラブとか超邪魔」

娘も負けじと声を荒げました。それは現実。現実はいつだつて受け止めるしかないもの。わかっています。でも、頭で理解することと、心で受け止めることは、違うのです。それに、少なくとも、この家のことで娘からいい加減にしろなどと叱られる筋合いは、ありません。

「お父さんのものがなかったら、お父さんが帰ってきたときに

困るじゃないの」

無意識に、私はそんなことを口走っていました。

娘は目を見開いて数秒間じつと私をみつめ、それから大きなお腹を両手でしっかりと抱えると、話にならない、とでも言いたげに、眉間にしわを寄せてひとつ大きなため息をつきました。そして何も言わずに夫の書斎に入ると、襖を閉めて二十分ほど閉じこもり、出てくるや、

「お父さんのパソコンに、そのうちリサイクルのお店から見積のメールが届くから。ときどきメールチェックしといて。やり方わかるよね」

そう言い残して、逃げるように、あるいは不審なものから身を守るように、帰っていったのでした。

晴れた日はできるだけ、窓を開けて家のなかに風を通します。十年前から何ひとつ変化のない夫の書斎も、空気だけは新しく清潔です。掃除機だって、床に埃がたまらない程度にはきちんと定期的にかけています。

それでも、襖を開けて書斎に入ると、部屋はまだ夫の匂いが充満しています。家具に、畳に、書棚の無数の本に、あるいは座椅子やクッション、カーテンの生地にも、それは繊維の奥まで染みこんでいるのでしょう。コーヒーの染みのように、茶色く、くつきりと。

私は窓辺に置かれた小さな文机の上の、時代遅れのパソコンのスイッチを押し、それが起動するまで待ちながら、夫の座椅子に腰を下ろして、机の引き出しに手をかけました。一番上の段には、財布や定期入れ、名刺入れ、携帯電話の充電コードなどと一緒に、腕時計があります。十年のあいだに電池が切れ、針の止まった時計。

夫の時間は止まっている。その事実が、また私の胸を窮屈にさせます。私はとうにわかっています。夫婦の暮らしなど、すでに

失われてしまったこと。夫がこの世にいないこと。当たり前じゃないですか、夫はもう十年前に死んだのですから。

夫がいないことと、夫を思う、ということとは、まったく違います。現実にはいない。でも、私が生きている限り、私の記憶と想像のなかでは夫が存在している。人間の心の外と内。ところがその明確なはずの区別は、ときどき、夕暮れの色彩のように曖昧になり、私はただ黄昏の海を眺めるように、思い出に足をとられながら、その境界に立ち尽くすしかないのです。

せつかく買ったのにね、この腕時計。

退職記念にと、夫はそれまで使っていた銀のベルトから、少しかジュアルな印象の茶色い革のベルトのものに買い替えました。わざわざ新幹線に乗って日本橋の専門店まで行って、店員さんに呆れられるほど時間をかけて一緒に選んだのです。

「一生ものだからな」

と、夫はショーケースに話しかけるように言いました。でもまさかあのときは、こんなに早くその一生が終わるなんて思いもしなかったでしょう。

夫の買物物は、いつだって高級志向でした。鞆も、靴も、スーツも、車も、いいものを買って手入れをしながら長く使うのが最も合理的だと信じて疑わないひと。いったいなにが合理的なのでしょう。高いものばかり買って、こんなに早く死んで。そのくせ、私のもものなんて滅多に買ってくれないけちなひと。ばかなひと。

恨み節をつぶやきながら、ようやく起動したパソコンでメールをチェックします。しばらくぶりに開いた受信トレイには、迷惑メールがどつきりと届いています。そのなかに、リサイクル業者からの見積はまだありませんでした。

ふと、インターネットを立ち上げ、検索欄に「夫 遺品」と入

力してみます。夫を失った妻たちは、遺品をどのように取り扱っているのでしょうか。夫の帰宅を想像してしまう私は、やはり頭がおかしいのでしょうか。

宵闇が迫り、夕方のニュース番組でローカルの天気予報が流れ出すころ、玄関からがらがらと扉を開ける音が聞こえてきます。誰にむけて口になっているのかわからなような、ただいま、という小さな声。居間に入ってくるや、テレビをBSの野球中継に勝手に切り替えて、勝ってる、とか、負けてる、とか、そんなことを、またぼそつと呟く。

おかげで私は、夫のいない夕方の時間に野球中継を見るようになり、選手にも詳しくなりました。今日は菅野か。夫が生きていたときはまだ入団していなかった選手の名が、自分の声と同時に、夫の声でも聞こえてきます。

私は夫の湯飲みに番茶を注ぎ、ソファの前の座卓に置きます。夫はそれに口をつけると、書斎に入って仕事鞆や腕時計をしまい、洋服箆笥からパジャマを選びます。どれも、伊勢丹の紳士服売り場で選んだ高価なパジャマ。それを小脇に抱えて風呂場に向かう夫の背中を見送りながら、私は食卓に箸や茶碗を並べていくのです。テレビの画面の隅には、3回表、などと表示されていて、それなら4回表までには準備しておかないと、なんて夫が風呂から上がる時間を計算しながら。それまでに、逆転してたらいいわね、なんて夫の機嫌がよくなることを期待しながら。

その習慣がある日突然にぷつりと途切れて、もう十年も経過したなんて。

気づくと私は、メールソフトの新規メール作成ボタンを押して、夫に向けた言葉を、語りかけるように並べていました。

へもう処分した方がいいのかしら。みんな、あなたの気に入っていたものなのだけど。この腕時計も、昇進のときに社長さんに



いただいた有田焼の湯飲みも、イヴサンローランのパジャマも。早苗の大学の入学式のために新調したスーツなんて結局一回しか着てないじゃない。ゴルフクラブなんていつまでも玄関に置いておいてもしょうがないわよね。でも動かすの大変なのよ。重いんだから〜

ばかみたい。

こんなメール、いったいどうすればいいのでしょうか。やっぱり、私は頭がおかしいのかしら。普通に暮らしているつもりだけれど、もう普通じゃなくなっていたのかしら。

ウィンドウの隅にあるバツ印を押して、私はメールを消去します。本当は最後に、へあなたと一緒に、早苗の赤ちゃんと会いたかったわ〜と打ち込みたかったのですが、そんなことを実際に書いたら、私はついに、涙を流してしまうでしょう。そしてこれまでの十年間で築き上げた、悠悠自適のおひとりさまの暮らしという、言葉の砦まで失ってしまうかもしれません。

ぴろん、と電子音がしました。新着のメールを知らせる音です。リサイクル業者かと思って開くと、様子が違いました。

〈久美子、ご無沙汰です〉

いったいどなたでしょう。私の名をこんなに馴れ馴れしく呼ぶひとは、夫と母以外、同年代の女友達くらいですが、彼女たちは〈ご無沙汰です〉なんて艶のない言葉づかいは決してしません。

〈十年前は突然のことで悪かったね〉

差出人の欄には、夫の名がローマ字で書かれていました。タイトルは、件名なし。

「俺のものなんて、みんな処分して構わないよ。捨てるのはもったいないから、売ってしまうのがいいだろうね。腕時計やゴルフクラブはいい金になるんじゃないか。地元の業者じゃあ足元を見られるかも知れないから、早苗に頼んで、ネットオークションにでも出してもらえばいい。それで、お前の好きなもの買ったらいいさ。貯金だって、まだろくに手をつけてないみたいだけれど、お前のために残した金なんだ。自由に使えばいいさ」

誰かのいたずらとしか思えませんでした。それは間違いない。夫の言葉でした。夫の呟れた声。抑揚。唇の動き。口臭。目元の笑い皺。どんな表情をしているかまで、はつきりと想像できます。

「いつかはお前もこっちに来るだろ。そしたらまた、一緒に暮らそうな。それまでは俺の分まで、たっぷり孫をかわいがつてくれや」

最後の一行で、ついに胸が詰まりました。

息ができない。肺のなかの空気がすべて抜き取られ、しぼんだ風船になったみたいです。唇を強く結んでおかないと、涙がこぼれてきそうです。泣かない。泣くもんか。十年も経って、いまさら泣くなんて。ぎゅうと嘔んだ奥歯から、ふっと力を抜いたときです。私は気づきました。

十年ものあいだ、夫の遺品を処分できずにいたのは、私自身に、夫に愛されたという自信がなかったからではないでしょうか。私は、夫が大切にしていたものを手元に残し続けることで、夫が確かに私のものだったと、ずっとずっと思い込み続けていたかったのです。

夫は、好意を言葉にしてくれるような人ではありませんでした

から。信じるしかなかった人ですから。

机の引き出しから、夫の腕時計を手を取ってみます。

ひんやりとして、少し重い。その重さが高価なものであることを無言で語っています。男の人は、きつとこういう価値を身につけることで、自分の人生を、その価値にふさわしいもの、と信じたのでしょうか。そう思えば、なんだか、かわいいではありませんか。ざらついた革のベルトは、懐かしい夫の肌のように感じられます。

ふと気配を感じて、画面に視線を戻すと、そこにはへお見積ありがとうございます<というリサイクル業者からのメールが表示されていました。

いつ届いたのでしょうか。そんなことより、夫のメールをもう一度読みたい。ところが、確かにそこにあつたはずの夫のメールが、どこにも見当たりません。受信トレイにも、ゴミ箱フォルダにも、下書きトレイにも送信済みトレイにも。パソコンの中のことを探しても。

あのメールはいつたいたんだつたのでしょうか。

私はしばらく、時間を失ったようにその場に座り込んだまま、ずっと画面を見つめていました。

娘に話したら、また気味悪く思われるだけでしょう。頭のおかしくなった母親の世話になるのは新生児を育てる環境として相応しくない、などと言いだし、里帰り出産をやめてしまうかもしれない。

いつの間にか日は暮れ、部屋は薄闇となっていました。パソコンの画面の青白い光がまぶしく感じられます。私は立ち上がって蛍光灯から垂れ下がるひもを引き、部屋を明るくすると、もう一度、リサイクル業者からのメールを確かめました。赤ちゃんがす

くすく育つて、玩具で遊ぶようになって、ひとりで歩けるようになって、この家に遊びに来たとき、玄関にゴルフクラブなんてあったら邪魔だわね、危ないわね。

涙がこぼれそうでぎゅつと目をつむると、そりやそうさ、と夫の声が聞こえてきます。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。  
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。